柿ノ本古墳

南高来郡瑞穂町古部所在の古墳の調査

瑞穂町文化財調査報告書

第　1　集

1978

瑞穂町教育委員会

Ⅰ　柿ノ本古墳の調査

―南高来郡瑞穂町古部所在―

例　　言

1．本書は，昭和45年11月14日から同月18日まで５日間，南高来郡瑞穂町古部（こべ）に所在する柿ノ本古墳について実施した緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は，長崎県教育委員会及び瑞穂町の共催によって，長崎県文化財課（現文化課）が中心となり，県文化財専門委員及び地元調査員諸氏によって進められた。

3．調査関係者は別記のとおりであるが，直接間接に地元の方々には多大の援助と協力を受けた。特に現場一帯は共有地であり，代表者，向島元年氏には，あたたかい理解と協力をいただいた，尊名を記して感謝申し上げる。また，瑞穂町教育長（当時）の楢山正信氏夫人には宿舎の便まで，暖かい御援助をうけた，記して感謝申し上げる。

4．調査関係者は次のとおりである。

石丸太郎（県文化財専門委員），古田正隆（日本考古学協会員），楢山正信（瑞穂町教育長　当時），松尾司郎・鈴木稔（瑞穂町役場），鳥山厚正・峰添勝一・境敦子（以上瑞穂町教委），島田平八郎（西郷小学校）

正林護・田川肇（県文化課）

その他国見高等学校の生徒諸君

5．本文執筆は正林が担当し，遺物実測は正林・田川・高野晋司，製図は正林・田川・溝口美津代による。

6．出土遺物は，現在瑞穂町教育委員会が保管している。

発刊にあたって

このたび，当町内にあります柿ノ本古墳についての調査報告書を，町の文化財調査報告書第１集として公刊することになりました。当古墳は，宅地開発による崩壊のおそれがありましたため，事前に調査が行われましたものでありますが，さいわい関係者の努力によって保存され現在に至っております。

調査が行われたのは，昭和45年の晩秋の事でありまして，この年は寒気が早く訪れましたために調査に当られた県文化財専門員の石丸太郎先生はじめ県文化課の方々も御苦労なさいましたが，鉄製の刀や矢じり，更には美しい玉類その他貴重な副葬品があり，当時の文化水準の高さをうかがわせる貴重な遺跡であるとうかがっております。

古い言葉に「温故知新」という事がありますが，昔のことを知って将来を予見すると，という意味でしょうか。私共の現在は，戦前からいたしますと，「もの」の面ではたしかに豊かに，便利になりましたが，目前のことにのみ走って，将来をながめる広い視野とやさしい心がうすれているようにも見うけられます。柿ノ本古墳の剣や玉を眺めて，その美しさと同時に，それらを磨いた先人の努力と，人間のやさしさを読みとってほしいと願うものであります。

終りに，本書を公刊するに当り整理と執筆にあたられた県文化課の方々に謝意を表する次第であります。

昭和53年１月15日

瑞穂町長　進　藤　勘　七

総　目　次

Ⅰ　柿ノ本古墳の調査 …… 1
1．調　査　の　経　過 …… 7
2．柿ノ本古墳の立地と環境 …… 7
3．調　　査 …… 11
4．む　す　び …… 27

Ⅱ　小野古墳の調査 …… 41
1．遺跡の地理・歴史的環境 …… 47
2．調　査　の　経　過 …… 50
3．調　査　の　概　要 …… 52
4．む　す　び …… 60
5．附　　録 …… 61

Ⅲ　久津石棺群の調査 …… 79
1．調査経過及び遺跡の立地環境 …… 84
2．石　棺　の　調　査 …… 84
3．む　す　び …… 87

Ⅳ　遠目塚遺跡の調査 …… 93
1．調査にいたるまで …… 99
2．位　置　と　環　境 …… 101
3．調　査　の　概　要 …… 104
4．ま　と　め …… 109

本　文　目　次

1．調　査　の　経　過……7

2．柿ノ本古墳の立地と環境……7

3．調　　査……11

(1) 位置と現状……11

(2) 墳　　丘……12

(3) 盛　　土……12

(4) 石　　室……12

(5) 遺　　物……14

4．む　　す　　び……27

挿　図　目　次

第１図　瑞穂町位置図…… 6

第２図　瑞穂町及び柿ノ本古墳位置図（１：50000）…… 8

第３図　柿ノ本古墳周辺実測図……10

第４図　柿ノ本古墳石室実測図（１／40）……13

第５図　柿ノ本古墳遺物出土状況（１／20）……15

第６図　柿ノ本古墳出土土器１（１／２）……17

第７図　柿ノ本古墳出土土器２（１／２）……18

第８図　柿ノ本古墳出土鉄刀（１／３）……20

第９図　柿ノ本古墳出土鉄器（１／２）……21

第10図　柿ノ本古墳出土鉄器（１／２）……21

第11図　柿ノ本古墳出土鉄器（１／２）……22

第12図　柿ノ本古墳出土鉄器（１／２）……23

第13図　柿ノ本古墳出土装飾具類（１／２）……24

表　目　次

表１．柿ノ本古墳出土遺物一覧……16

表２．柿ノ本古墳出土装身具一覧１……25

表３．柿ノ本古墳出土装身具一覧２……26

図　版　目　次

図版１　柿ノ本古墳と宅造工事

図版２　柿ノ本古墳近景と石室

図版３　石 室 全 景

図版４　石　　室

図版５　遺物出土状況

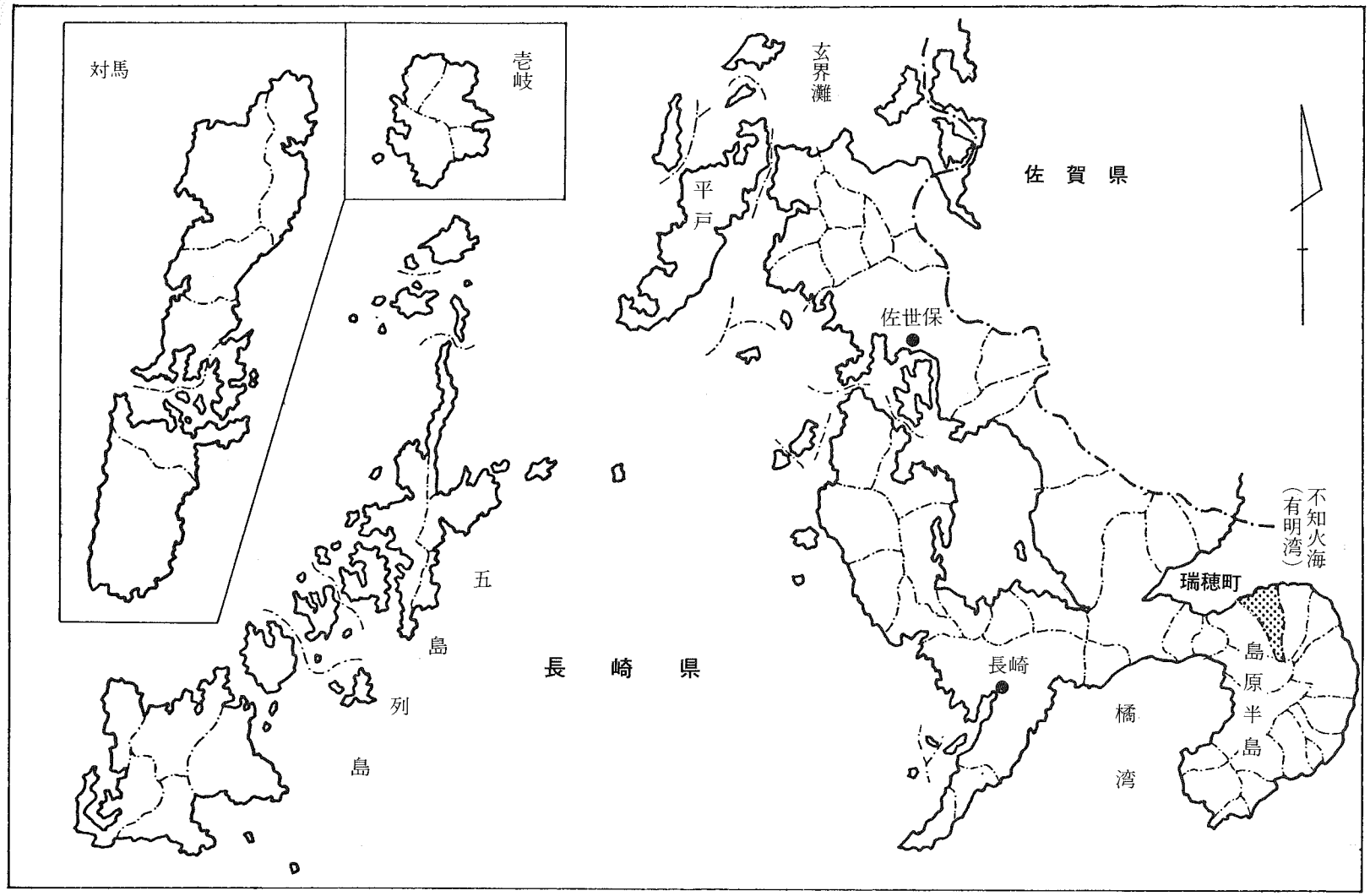
図版６　遺物出土状況

図版７　土　　器

図版８　鉄　　器

図版９　鉄　　器

図版10　装飾品及び臼歯



第1図　瑞穂町位置図

Ⅰ　柿ノ本古墳の調査

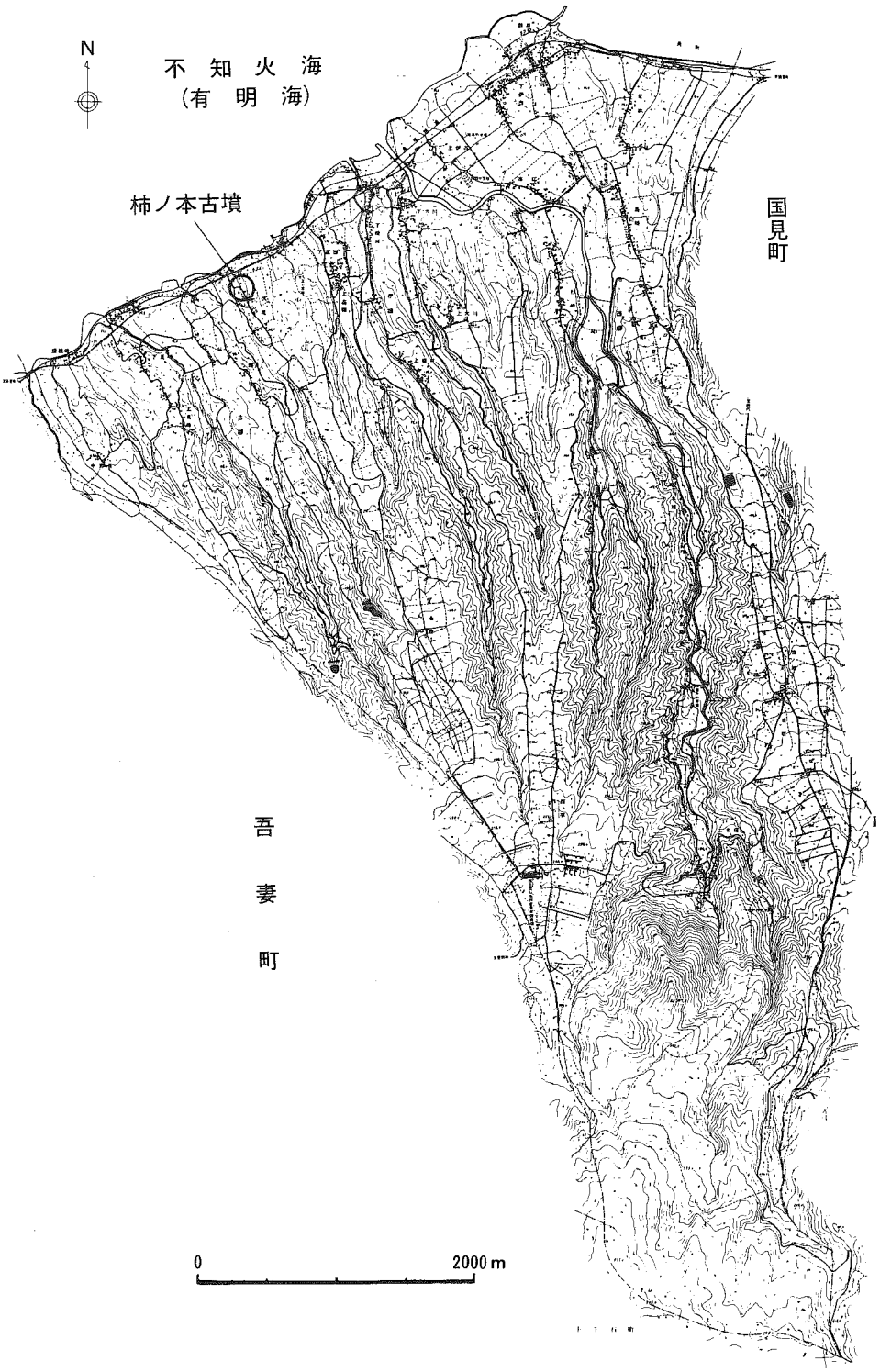
1．調査の経過

長崎県南高来郡瑞穂町古部(こべ)1430番地において，採土と，採土跡地の宅地化が行われたのは，昭和45年度初頭であった。その面積は40m×70mの範囲にすぎなかったが，採土の行われたのが，雲仙岳北麓の緩傾斜台地辺端部であり，崖面は約10mの急崖となり，屹立する崖面の直上部に，柿ノ本古墳が位置しており，崩落の危惧が生じた。発見時点において，雑種地となっていた柿ノ本古墳の地点は伐採も行われ石室が露出し，遺物が若干散失した。現地教育委員からの急報により，県文化課担当者が現地に急行し，緊急調査の必要が指摘された。

柿ノ本古墳は，採土宅地化工業現場（第３図）直上の微高丘陵を横断する小径により羨道は損壊され，すでに失われていた封土と，露出した玄室，前室内も，かなり影響をうけたらしい。地元教育委員会所蔵の遺物は，この時点で発見されたものである。この時点での遺物は，勾玉１，管玉４，水晶製切子玉３，金銀環11，須恵器２，鉄器18，人骨片若干であった。

2．柿ノ本古墳の立地と環境

柿ノ本古墳は，長崎県の南辺を占める島原半島の北岸，南高来郡瑞穂(みずほ)町古部(こべ)1430番地にある。島原半島は行政区分上は島原市と17町より成り，北岸は不知火海(しらぬい)（有明海(ありあけ)）に望み対岸に熊本県を遠望し，東南は不知火海上指呼の海上に天草諸島を望む。南西岸は橘海湾及び東支那海に面している。半島全体が，愛野地峡によって肥前半島に直結している。半島のほぼ中央には特別名勝に指定されている温泉岳（雲仙岳）の主峰群である普賢（1359m）・妙賢岳（1293m）等が屹立している。これら雲仙主峰群の直下は，半島の西部を除いて高燥な平坦地をなして，北・東・南方向に緩い傾斜地をもって扇状地形を形成している。この緩傾斜地面には，放射状に若い峡谷ができて，行政区画は，ほぼこの自然地形によっており，半島の北辺及び東辺の市町界を見れば，略二等辺三角形の平面形をなしていることに気付くであろう。このため扇頂部において数箇町が境界を接している。雲仙主峰群は休火山であり，半島全体が脆弱な火成岩を基盤として成立しており，若いローム層と火山灰質土壌によって覆われている。このため，雨



第２図　瑞穂町及び柿ノ本古墳位置図（１：50000）

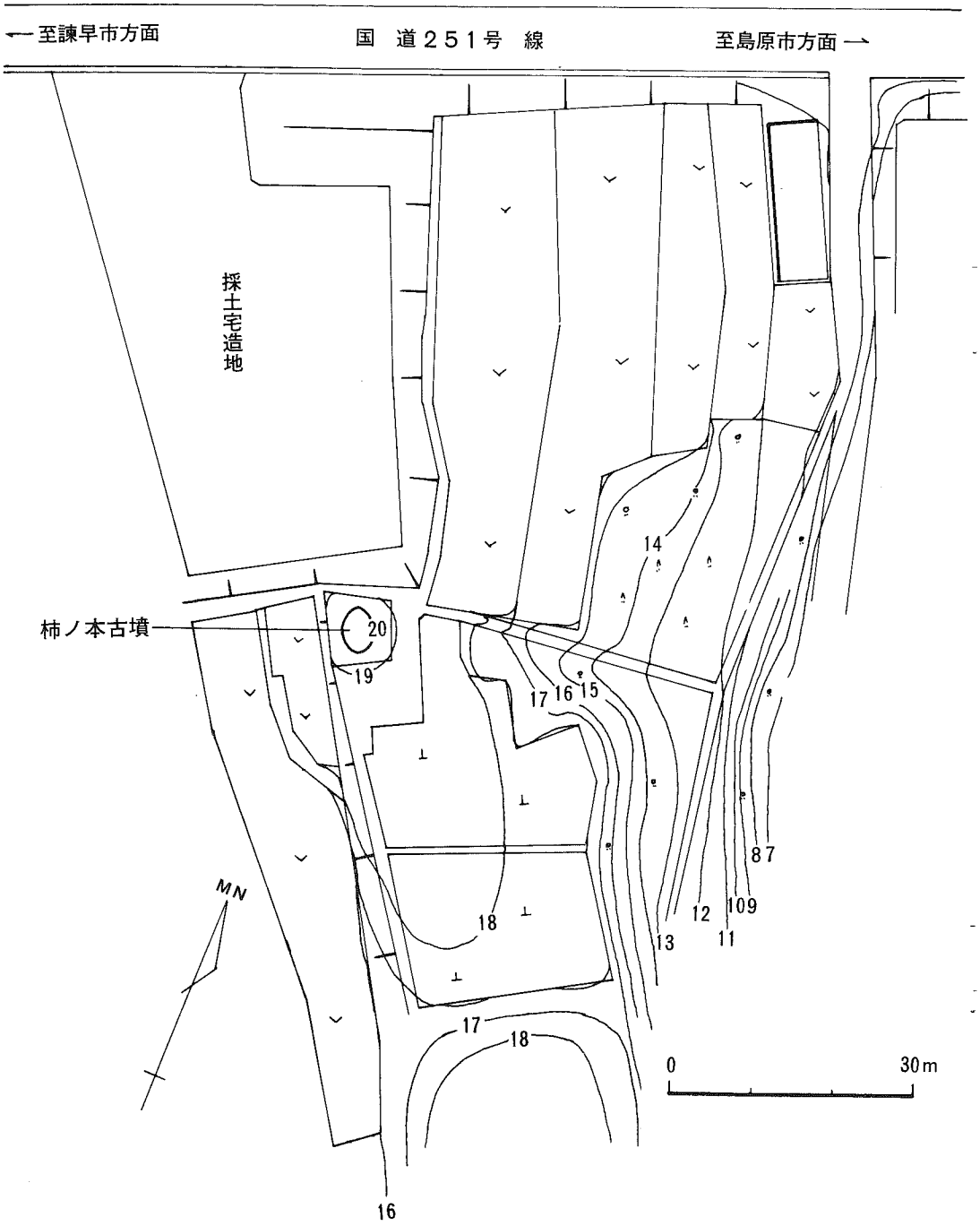
水は扇状地を伏流しており表流河川はなく，深い峡谷を走る河川は倭小短流である。

瑞穂町は，雲仙岳主峰群から北方向に走る古江川と，それによって潤おされる西郷地区を東辺として国見町に東接し，西方は，中野原の緩傾斜をもって吾妻町に接している。瑞穂町の北辺は，ゆるやかに不知火海（有明海）に没して比較的単調な海岸線を構成している。現在，この海岸線を島原鉄道と国道251号線が走り，東には島原市方向へ，西は諫早市方向へ走っている。柿ノ本古墳のある瑞穂町古部の一帯は，島原鉄道の「こべ駅」及び「たいしょう駅」のほぼ中間にある，微高扇状台地北端に位置する。この微高台地の辺端部はゆるく有明海に没するが，前述の鉄道及び国道がこの微高丘を横断している。

柿ノ本古墳の緊急発掘調査の契機になった採土宅造事業は，国道に面する丘陵背稜の西側約1200mにわたって行われた。この一帯は一部墓地になっているが，多くは甘橘等の畑地となっており，柿ノ本古墳の陜少な範囲は雑木林のまま放置され共有地になっている。この雑木林の北辺が当該の事業によって削られ，古墳の羨道部に及んだわけであるが，すでに小径によって羨道部は削りとられていたらしい。柿ノ本古墳のある微高丘陵ないし扇状地は，島原半島半岸の各市に類似した海岸地形をなし，丸塚古墳（円墳・全国遺跡地図[註1]長崎県28—86　吾妻町），杉山古墳（円墳・同地図28—87　吾妻町），コロ松古墳（円墳・同地図28—88　吾妻町），筏（いかだ）古墳（円墳？・同地図31—97　国見町），金山古墳（円墳？・同地図31—104　国見町），高下古墳群[註2]（同地図31—102　国見町）等がある。これらは柿ノ本古墳の立地形（標高18m）とほぼ同様の地形に立地しており，標高は海岸部に近く，低い。

註1．「全国遺跡地図42　長崎県」　文化庁文化財保護部　1976

註2．小田富士雄「高下古墳調査報告」　国見町教育委員会　1959



第３図　柿ノ本古墳周辺実測図

3．調　　査

柿ノ本古墳の調査は先述のごとく昭和45年11月14日から18日まで実施したが，羨道部はすでに小径の開設によって失われており，封土も大半失われていて墳丘の形態を留めていなかった。また，雑木林の中にかろうじて残っていた玄室及び前室も最下部の巨石材を残すのみで，平面形を認め得る程度であった。

調査に当っては周辺部を含めた地形実測（600分の１），遺構実測（10分の１），遺構各部（５分の１）を行い，石室等の残された遺構内の発掘調査を実施した。

柿ノ本古墳は先述のごとく，後世の人為によってかなりの損壊が見られ原状を窺い得ない点も多かったが，軸を北方（有明海）に向けて構築された，直径10余ｍの円墳であったと考えられる。

直接の発掘調査によって検出した遺物は，須恵器片，鉄鏃等の鉄製品，金・銀環，小玉類に骨片を含めて40余点に留まったが，調査以前において採集されていた遺物が瑞穂町教育委員会に収蔵されており，これらを含めて70余点の遺物があった。本報中の遺物はこれらを含めて報じている。なお，地形実測には，瑞穂町役場土木課の職員の方に直接協力いただいた。記して感謝申上げる。

本報が遅延した責を回避する言を持たぬが，長崎県文化財課（現文化課）がスタートして直後でもあり，体制未備のまゝ，開発に直面しての緊急事態に追われて現在に至っており，やゝ旧聞に属する報文であることを了されたい。

(1) 位置と現状

柿ノ本古墳は，島原半島北岸を東西に走る国道251号線によって横断された通称「柿ノ本」とよばれる小高い丘陵の北端部に構築されており，道路より山の中へ約60ｍの位置にある。この微高丘陵は南→北の方向に張り出しており，丘陵の稜線の西側寄りに構築され，西方の現水田に軸線を並行させている。従って，丘陵の東手，大正小学校方向からは観察し難く，西方の下夏峰の方からが望見し易い。先に述べたごとく，島原半島の北東部は緩い扇状地形になっているので丘陵稜線を走る縦道が旧来発達しているが，逆に丘陵を継ぐ横道は古来発達していない。先述の諸古墳も丘陵の稜線上に構築されたものはなく，多くは稜線のいずれかの側に片寄せて構築されている。扇状地形を走る河流が造る若い谷は深く，古来，峰々を横断する活動は制約され，「横」に動き易い海岸部と，それに直交する「縦」の道，つまり尾根道または谷道が最も自然地形に適した行動動態であったことによるものであろう。丘陵上に構築された古墳の

位置は，こうした日常行動を妨げない位置，つまり，稜線を外した位置に意図的に構築されたものであろう。

柿ノ本古墳は，現状，雑木林になっているが直接周辺は一部を墓地として，他の多くは畑地として造成されている，本墳の西側は急崖となって谷道上に屹立した景観を呈し，墳丘は失われているので明確にし難いが，標高18～19mのあたりが築造以前の地形，つまり基盤であったと考えられる。

(2) 墳　　丘

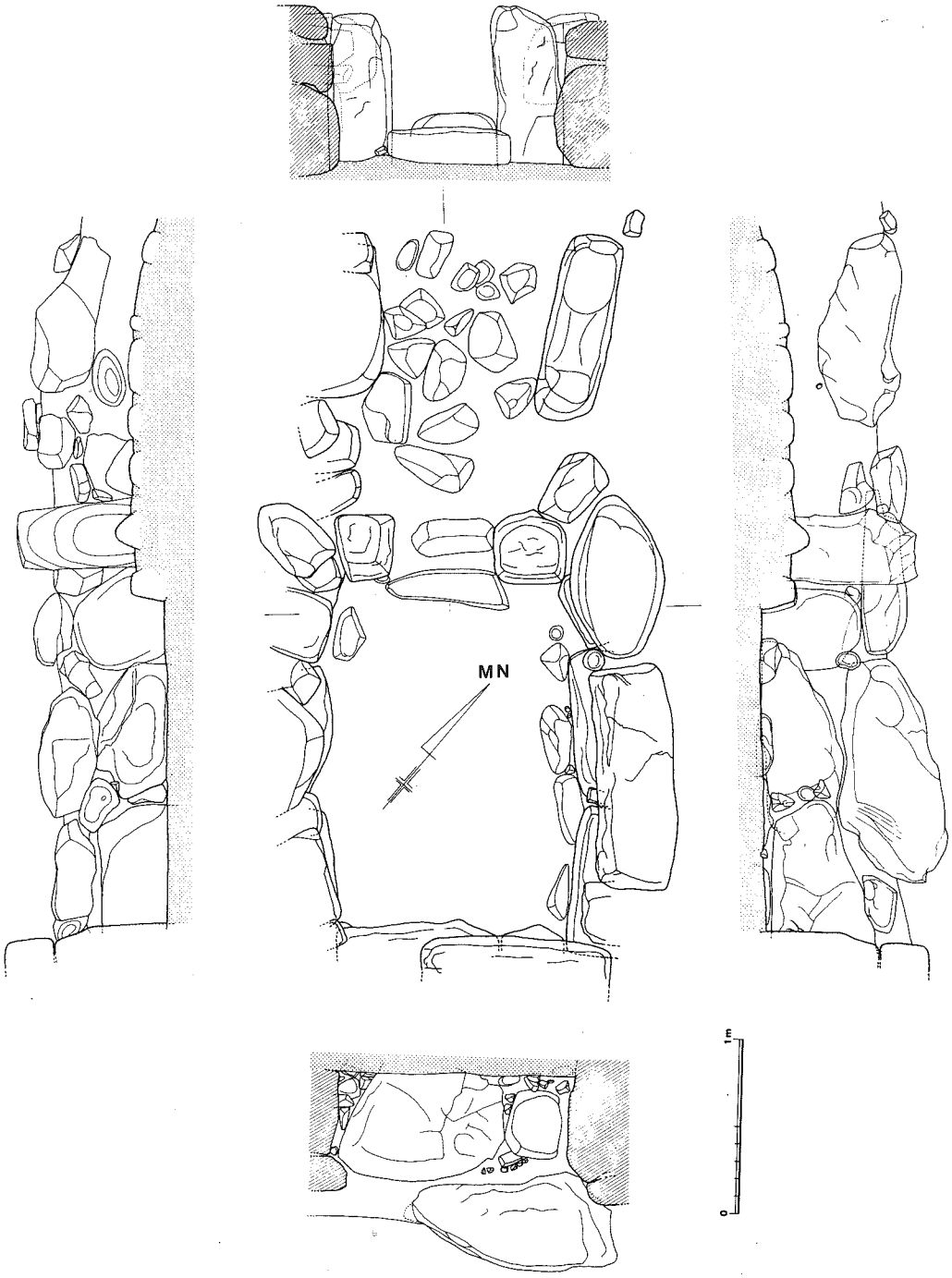
柿ノ本古墳の墳丘は後世の人為等によって殆んど失われており，原形を留めない。従って墳丘の規模・土盛り等は殆んど明確にすることができないが，現在の墓地上を走る18mの等高線の範囲（北半は採土工事によって不明）の微高地形上が選ばれていることが明瞭である。この等高線の範囲には，更に19mの等高線の範囲が南北約12m，東西約８ｍあり，20m等高線の範囲が南北６ｍ，東西約５ｍ認められ，総じて，丘陵上にできた微高独立丘の観が図面上で見られる。柿ノ本古墳がこの自然地形を意図的に選択して構築されたことはまちがいないところであろう。因みに，墳丘構築の状況を知るべく露出した玄室東手に0.5m×2mの小トレンチを設定したが，殆んど地山のまゝの傾斜が見られ，少くとも20mの等高線の範囲までは地山の削平等は行われていない。但し，等高線20m以上の陝隘な範囲は，石室の築造が行われているから，ごく小範囲の削土が本墳築造にあたって行われたと見てよい。

(3) 盛　　土

本墳の場合，殆んど石室の側壁石材のうち最下段の構築材を残すのみとなっているので盛土も遺存していないので報告不可能であるが，第３図に見るごとく，略方形の雑木林範囲に19mの等高線が楕円形に認められ，現在残されている石室石材より天井石材の上端を求めれば標高にして約23mと推定されるので，この上に盛土が行われたとすれば19m線上との間は傾斜度35°程度が求められる。以上の推定に立てば軸長12m強度の円墳であったと推定される。

(4) 石　　室（第４図，図版２～４）

横穴式石室で主軸はN－43°W に向けられている。袖石によって区切られた北半の部分は，



第４図　柿ノ本古墳石室実測図（１／40）

石室南半よりや狭幅になっているが，以北の部分は破壊されていて明瞭でない。全体に安山岩室の巨石を腰石として使用し，床面より0.7m程度の部分まで1～2個の材をもって積上げている。これ以上は石材が同一レベルで欠落しており石材規模その他一切不明である。但し，南西の奥壁（以下南奥壁と呼ぶ）から袖石の中心線まで約2.2m，東西壁の幅員は1.4mを計る。袖石から北側は南北は知り得ないが石材の凹凸は別にして東西壁間の幅員は1mと狭く，袖石以南の石室幅に比して約$\frac{2}{3}$にすぎない。おそらく単室構造で，袖石及び框石以北の部分は羨道と考えた方が無難であろう。島原地方及び，有明海の南西対岸である北高来郡小長井町や同郡高来町に所在する古墳の構造を見れば，多少の差はあれ，1～2個の巨石を腰石として用い，以上は小ぶりの石材ないし板状石を用いて断面をアーチ型に持ちおくる構造が見られるので本墳も同様に持ち送りにして天井石を被覆する構造であったと考えられるが憶測の域を出ない。

調査着手時点では石室内を斜に走る礫列が2個の人頭大礫をもって敷設されていたが、いずれも床面に推積した土の上に乗ったものであり，後世の人為であろう，勿論その意図も不明である。また，本墳は崩壊の時期を知り得る資料に接しなかったが袖石以北には人頭大の礫群が無秩序に置かれてあったが，本墳を乗せる丘陵を横断する小径を開発するに際して羨道部の石を投棄したものと考えられる。

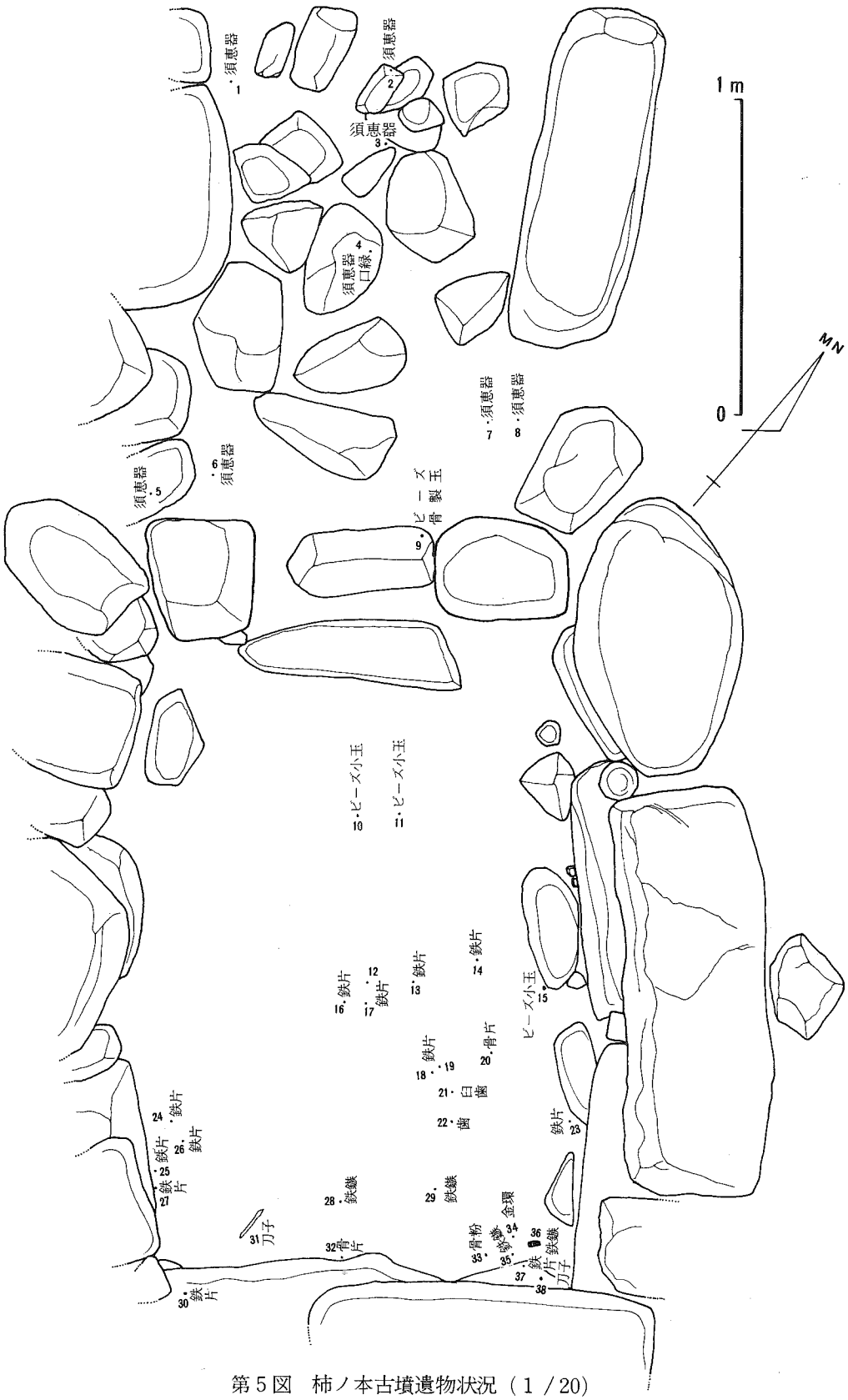
石室の内部における床面は砂利が敷設されており被葬面であろう。遺物の検出をみたのもこの砂利敷の床面において見られた。

以上のことよりして，本墳の築造過程を概観すれば，標高約20mの自然丘陵の頂上付近を約1m掘り下げて被葬面を確保し，腰石となる0.5m×1m程度の巨石を2段積みに立てて石室構築の第1段階としたと考えられる。勿論，自然地形の旧状が不明であるので，以上のことは不明である。直接周辺に，本墳の石室構造材と考えられる石材を見ないので，本墳の不作意の損壊は石材の需要による意識盗掘とも考えられる。

(5) 遺　　物（第6～13図，図版7～10）

出　土　状　況（第5図，図版5・6）

遺物は，石室東側に設定した小トレンチから出土した2点の土器片を除けば，瑞穂町教育委員会保管分を含めて全て，袖石を境にした遺構内部出土である。但し，被葬面のみの出土ではなく，腰石の上部や，袖石北側の投棄された礫の上部にも一部認められた(第5図)。また，遺物の検出部位は石室南奥壁の東寄りに最も多く検出され，骨粉に近い微小骨片もこの部位において認められたことは被葬者の埋葬位置を窺わせる。また，検出された土器片の大半が袖石北側において認められたことも特長的な事柄であった。鉄器類の検出部位が，石室の南奥壁に片寄



第５図　柿ノ本古墳遺物状況（１／20）

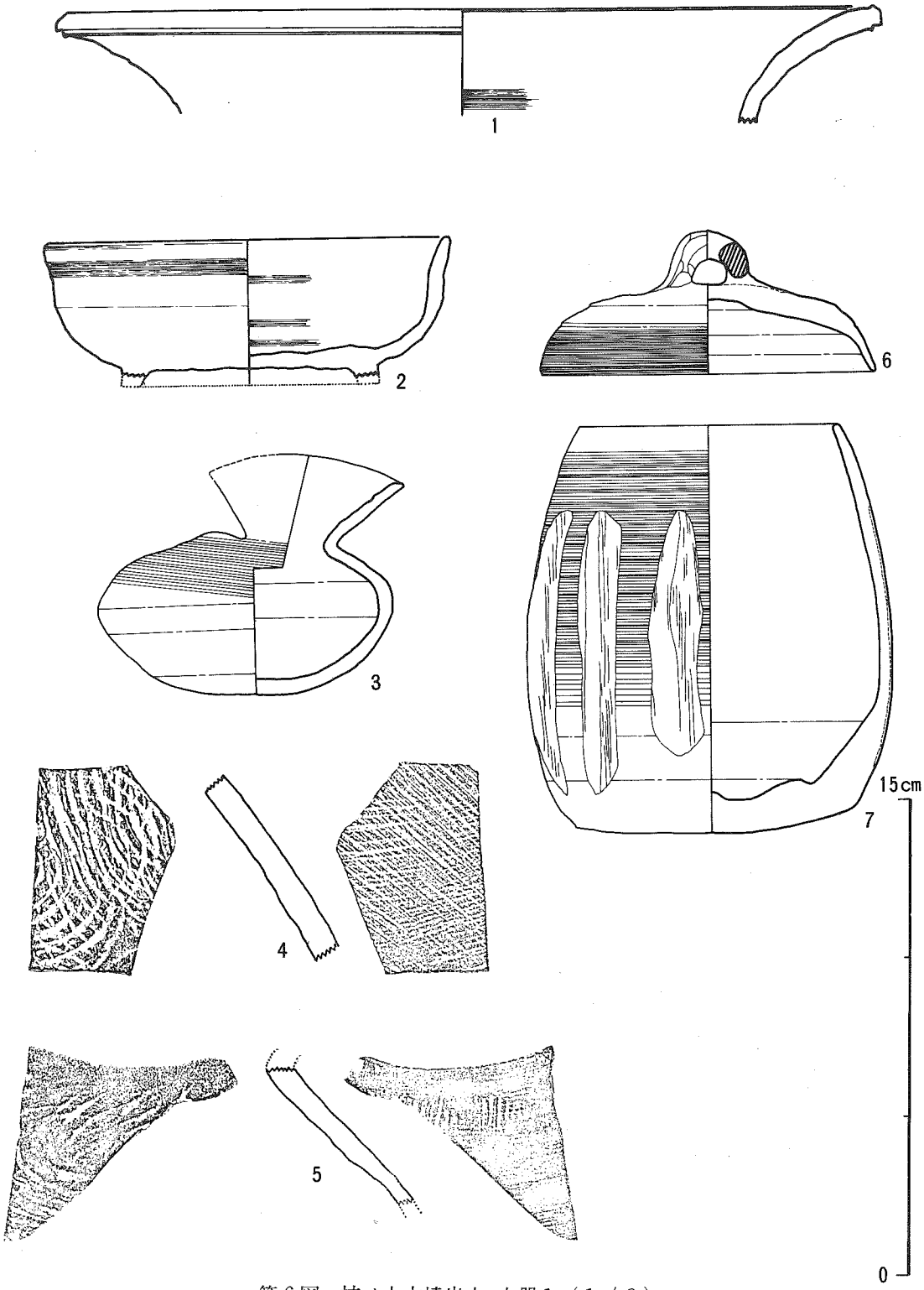
り，軸線の両側において検出を見たことも特長的である。本墳の調査において検出した遺物は表1のとおりである。

No.	遺物名	出土位置	備考	No.	遺物名	出土位置	備考
1	須恵器片	前室		21	臼歯	玄室	
2	〃	〃	崩落石材の上	22	〃	〃	
3	〃	〃		23	鉄器片	〃	
4	〃	〃	崩落石材の上	24	〃	〃	
5	〃	〃	前室西壁石材の上	25	〃	〃	
6	〃	〃		26	〃	〃	
7	〃	〃		27	〃	〃	
8	〃	〃		28	鉄鏃	〃	
9	骨製小玉	〃	框石の上	29	〃	〃	
10	ガラス小玉	玄室		30	〃	〃	奥壁石材の上
11	〃	〃		31	刀子	〃	
12	鉄器片	〃		32	骨片	〃	
13	〃	〃		33	〃	〃	
14	〃	〃		34	金環	〃	
15	ガラス小玉	〃		35	鉄鏃	〃	
16	鉄器片	〃		36	〃	〃	8点一括
17	〃	〃		37	鉄器片	〃	
18	〃	〃		38	刀子	〃	奥壁石材の上
19	〃	〃		39	須恵器片	東側トレンチ	地山
20	骨片	〃		40	〃	〃	〃

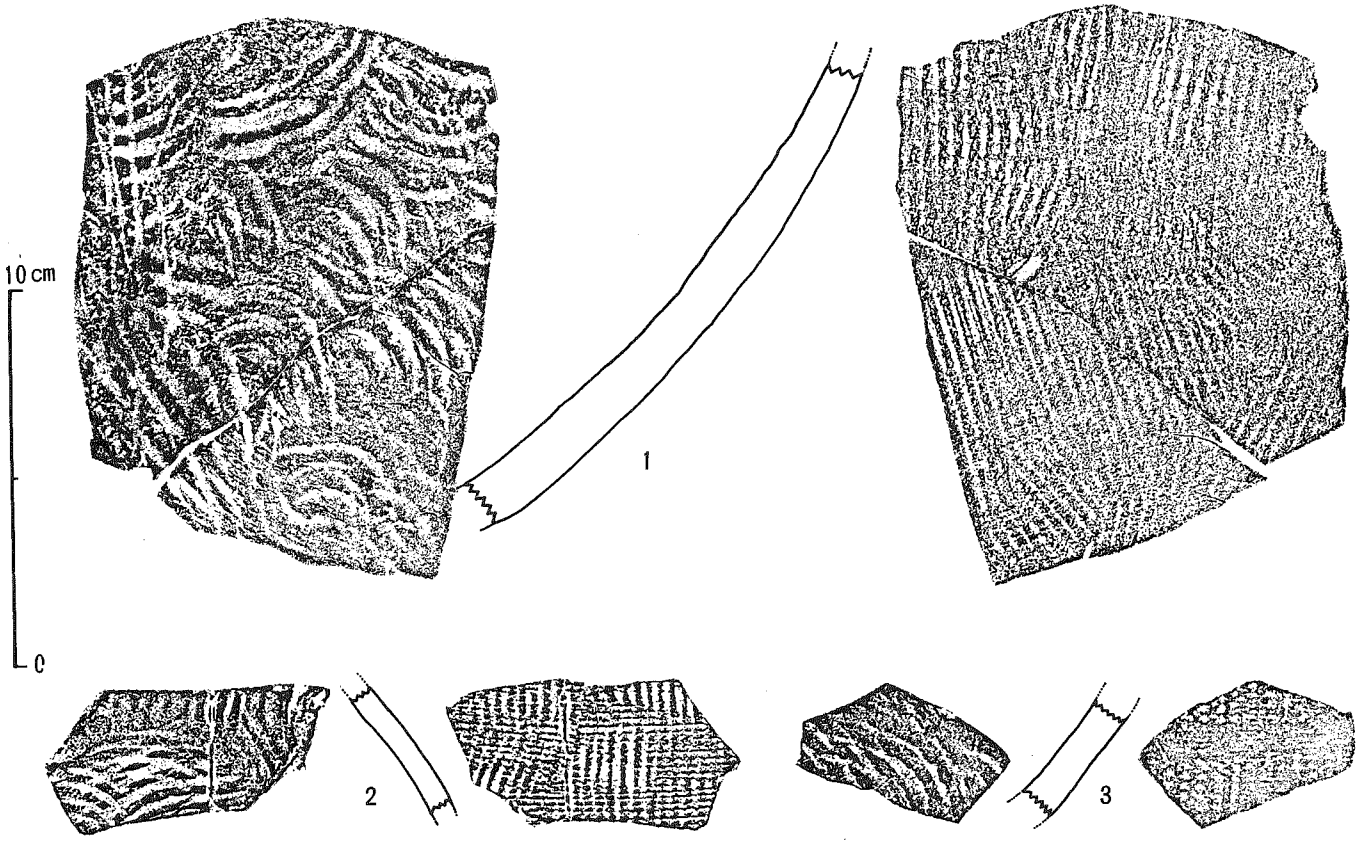
表1．柿ノ本古墳出土遺物一覧

須恵器

蓋 第6図6（図版7）に示した須恵器で，径10.7cmを計る。天井部には幅1cm，厚み0.7cmの弯曲した「つまみ」を貼りつける特異な天井部の付着物としている。体部外側との間には浅い沈線を1条めぐらしているが内外面とも全体として丸みをおびている。体部から，沈線をへだてて，天井部の1cm幅程度までは回転横ナデの跡が残り，内側は全面に回転横ナデが施されている。外面の天井部，径7cmまではヘラ削が施されている。[註1]



第6図　柿ノ本古墳出土 土器1（1／2）



第７図　柿ノ本古墳出土 土器２（１／２）

平瓶　第6図3（図版7）に示した1例がある。体部最大径は9.3cmを計り，器高7.6cmを計る。口頸部は体部の中心からずらして斜に傾けられ，口唇は長楕円形に曲げられている。口唇部は，体部最大径よりも外側に張りだし，注口器をうかがわせる。体部はやゝ上よりも屈析して肩をなしている。口頸部は内外面とも回転横ナデが施されており，体部に接合後口唇部の変形が行われている。体部は，肩部以上は回転横ナデが施され，以下は回転横ナデが肩部直下まで施され，丸底の部分はヘラ削りが施されている。

坏　第6図2（図版7）に示した土器片である。付高台をもつが高台下端が欠損している。口径12.8cm，器高は付高台が欠損しているので明確でないが推定高4.5cm程度であろう。内外壁，高台部共回転横ナデが施されているが底部はヘラ削り後の調整ナデが施されている。器形は全体に丸みをおびて安定した感じを与え，高台端部は外方に張り出しており特に安定感を与える。口縁部は外方への引き出しが弱く，僅かである。

甕　第6図1・3・4，第7図に示したものがある。第6図1は中形甕の口頸部破片であり，低く，大きく外反する。体部は肩張りの強い器形となり，おそらく最大径をなすものであろう。口径26cmを計る。口縁部は，やゝ肥厚して丸みをおびており，口縁直下に鈍い沈線をめぐらし，口縁部端の内側にも同様の技法を観察する。内外壁とも回転横ナデによる整形を行っており，口頸部下端は強く外方に折れ，体部との接合部で破損している。中形の甕である。第6図4は甕の体部小片であろう。内側は同心円文を重ねた青海波文を施し，外側は刷毛目を強く施し斜交させている。5は甕の体部で，口頸部との接合部で，強く折れ曲る部分で破損している。接合部は回転横ナデを施してあり，以下の外側は格子目様の叩き目文の上にカキ目の調整が見られ，内側には同心円文が残っている。肩張りのあまり強くない丸みをおびた体部器形をもつものであろう。第7図2・3は，やはり甕の胴体部の小片であるが整形と施文は第6図4・5と同様である。小片のため器形復原は困難である。第7図1も同様に甕の体部，おそらく底部に近い部分で，比較的大形のものであろう。外側は格子目文の上に荒いカキ目を施しており，内側は同心円文を重ねている。出土土器のなかで最も焼きが甘く脆い。器形は，肩張りのない丸みをおびた甕の体部といえよう。

変形鉢　第6図7は特殊な器形をもち類似の器形を見ず教示を得たいものである。第6図6の蓋とのセットかとも考えられるが憶測の域を出ない。器高は12.8cmをはかり，口縁部は，僅かしか残っておらず推定径8.2cmである。器形は全体に丸みをおび，最大径は下半部にあり一見安定感を与えるが肉厚の底部は幾分丸みをもっている。口縁部は緩く内湾して，うすく仕上げられているが5段の整形が見られ，口縁部に上るほど間のびしているのは，口縁部にいたるほどにうすく整形していることによる。内外面は回転ナデが施されており，その後外面にはヘラ削りによる，縦方向の幅の広い凹文が施されている。この凹文は，口縁のやゝ下から，殆んど底部近くまで一気に施されており，上下端は弱く陜幅であり，中央が最も広幅で1.5cm程度ある。この凹文は，1cmのほゞ等間隔で15本を数える。底部は荒れていて調整は明かでない。

鉄　器（第８～12，図版８・８）

鉄器には，鉄刀，鉄鏃，刀子があり，鉄鏃が最も多い。調査以前に発見され，瑞穂町教育委員会所蔵のものもあるが，これらを含めて報じる。

刀　第８図に示したものは町教育委員会所蔵である。刃部茎部含めて60cmを計り，刃部は50.22cm，茎部は９cmを計る。刃部は幅3.2cmで背は丸く，茎端は，やや欠損して明瞭でないが，茎全体はテーパー型で目釘穴１をもつ。鞘尻が僅かに残り，平面型か楕円形の鍔が約半分銹着遺存している。別に，第９図２も鍔がある。全体の約$\frac{1}{3}$が遺存している，楕円形を呈すると考えられ長楕円型の穿が６箇あけられるものであろう。第９図４は茎と刃部の一部であるが第８図１に比して茎がうすく，刃部同様の断面をもつ。刃部の背は丸みをもち幅３cmを計る。

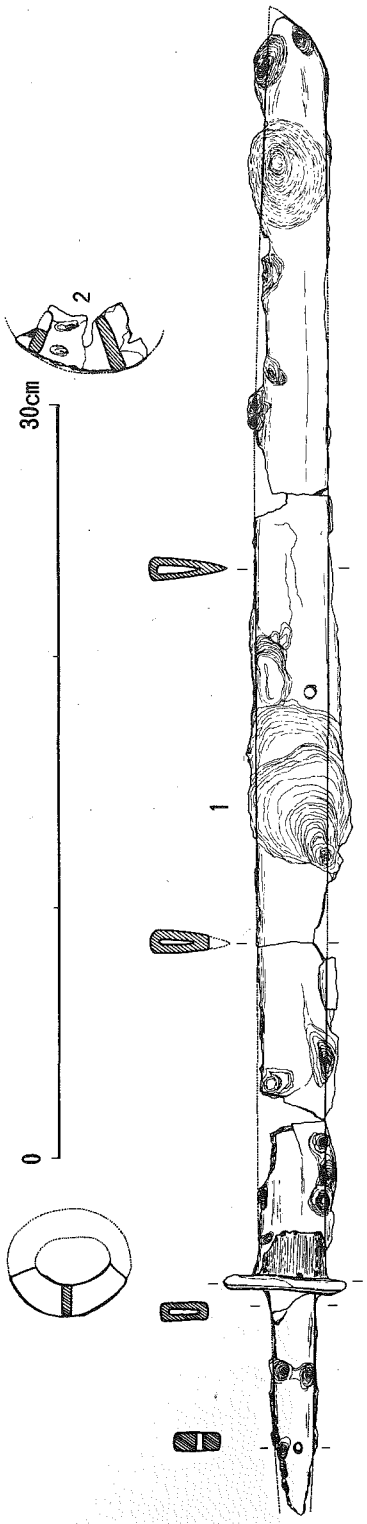
刀子　第９図及び第10図１を刀子としてあげた。第９図１・８はやや幅広であり，特に８は，第９図４に似た断面をもつが刀に比して幅が狭く，刀子として扱った。同図２・３は完形に近いが他は残欠である。第10図の１は木柄が残されている。以下，形状別に分類すれば次のごとくなる。

Ⅰa 類，やゝ幅広の刃部をもち，背と茎が一線となるもので１がそれである。刃部長は不明であるが幅は1.8cm，茎は幅0.7cmを計り長方形の断面をもつ。刃部は斜に切れおちて茎に至る。

Ⅰb 類，８としてあげたものがこれに属し，刃部が斜に切れおちて茎をつくるが，扁平な断面形をもつ。

Ⅱa 類　Ⅰ類に比して陝幅で１cm程度を計るもので，刃部が斜めに切れて茎をつくり，扁平な断面をもつもので第９図の２・３がこの類として挙げられる。

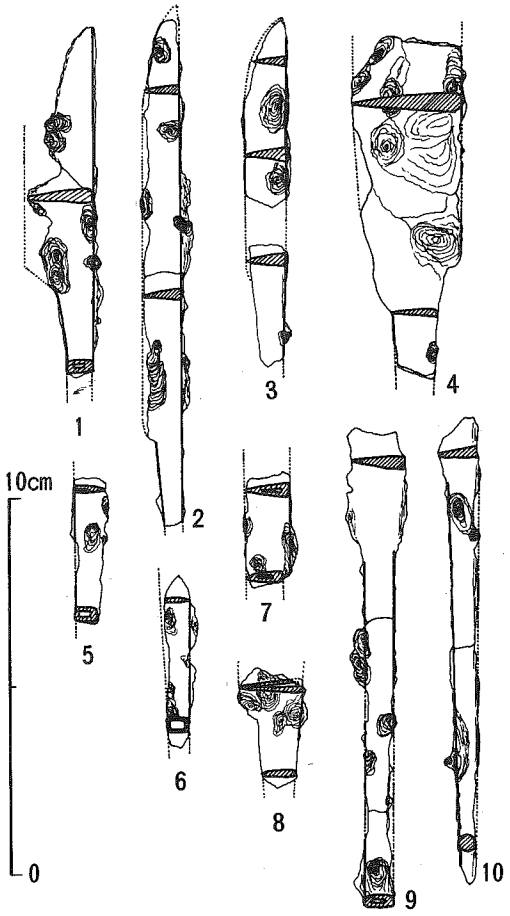
Ⅱb 類　第９図５・６がこれであり，Ⅱa 類に比して茎の断面形が異る。



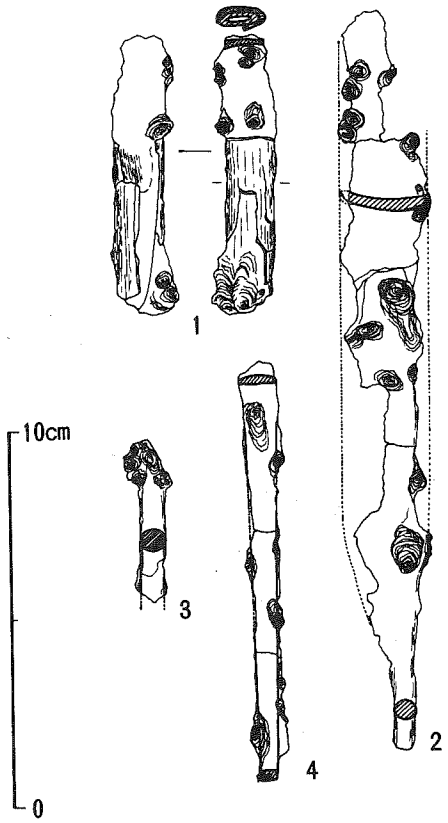
第８図　柿ノ本古墳出土 鉄刀（１／３）

Ⅱc 類　7・9をこの類として分けた。刃部の上下から斜めに切れおちて茎をつくるもので7は，やゝ明瞭さを欠くが，下端にその痕跡が観察される。

Ⅱd 類　10がこれである。長大な茎をもち断面が円形をなす。



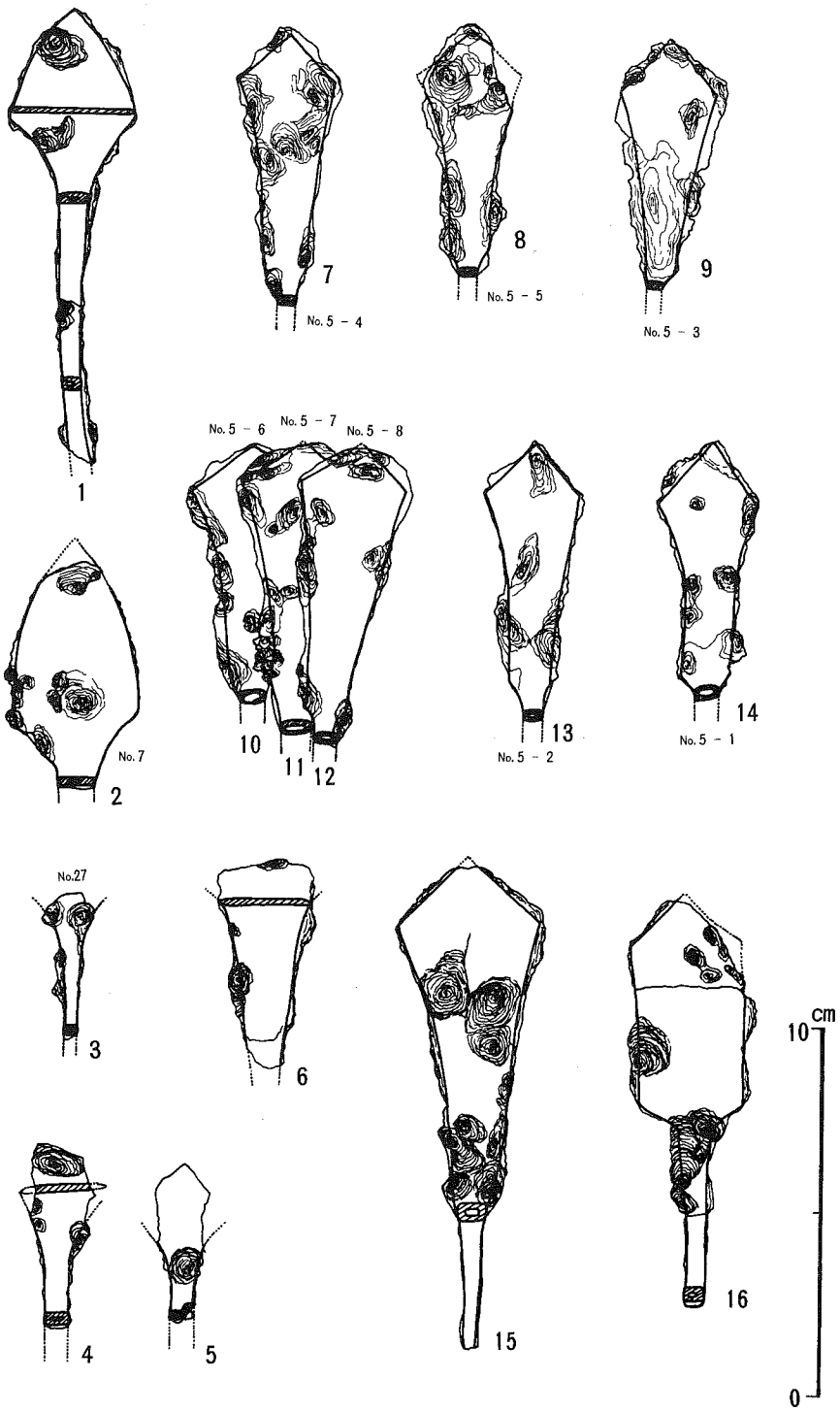
第９図　柿ノ本古墳出土 鉄器（１／２）



第10図　柿ノ本古墳出土 鉄器（１／２）

鉄鏃　瑞穂町教育委員会所蔵のものを含めて最多量を占める。発掘調査時点においては，主として石室の南奥壁に近くまとまって出土した。第11図の７～14は一括して出土したもので，刺身状に並べられ，銹着いて出土した。鉄鏃として第11・12図に示した31点のうち第11図１・２・６～16以外は，いずれも鏃の茎の部分で，原形状は知り難い。形状のよく知られるもの前記13点について形態別に分類可能である。

Ⅰa 類　第11図１がそれで，後藤守一の分類[註2]によれば変形広根斧箭式に属する。チゴノハナ



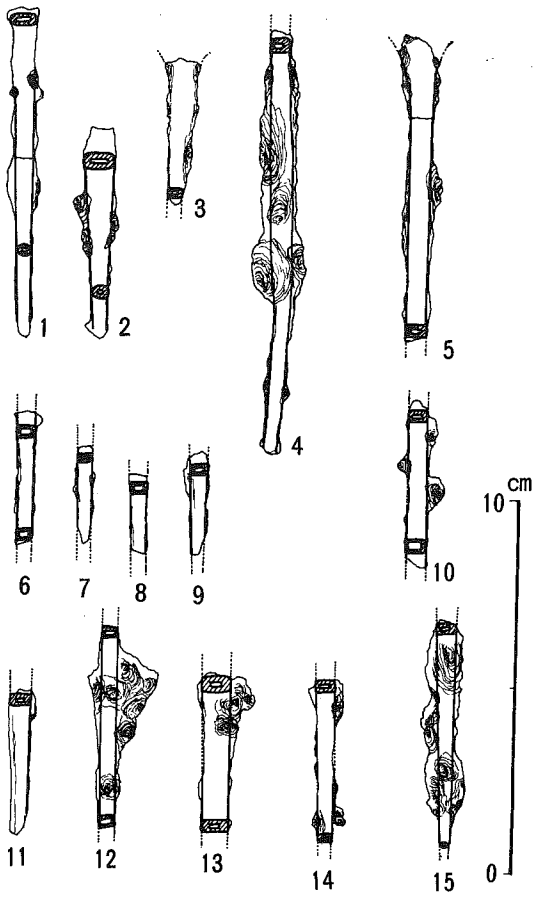
第11図　柿ノ本古墳出土 鉄器（1 / 2）

第３号墓[註3]出土の形式に類似形をもち，扁平な刃部をもち，共に長方形の断面をもつ。

Ⅰb 類　本来はⅠa 類と同形のものであるが，刃部がやゝ長大である。あるいは唐ケ坪４号墳[註4]出土の長三角形鏃に近い形式かもしれない。本来はⅠa 類と同形にまとめられる形式かもしれないが，一応分けて報じておく。

Ⅱa 類　第11図６～14の14点がこれで，後藤守一の分類によれば圭頭広根斧箭形式であり，瑞穂町の東隣，本県南高来郡国見町高下古墳[註6]や，同郡南串山町遠目塚遺跡[註7]（本集報所掲）の箱式石棺出土のものに似る。この類は刃部の長さ約７cm，幅３cm弱にほゞ統一された規格性を見せる。

Ⅱb 類　第11図15がこれで，本来はⅡa 類に含めてでも大過ないと考えられるが，刃部が長大で10cmと３.９cmを計り，一応区別してⅡb 類として報じておく。



第12図　柿ノ本古墳出土 鉄器（１／２）

Ⅲ類　広根の五角形鏃で，本県上県郡峰町チゴノハナ３号土壙墓[註8]出土のものに似る。茎断面は方形に近く，刃部は扁平な断面をもち，茎との接点部からの長さ５.２cm，幅は３cm弱である。

鉇　第10図の３点がある。１は木部が遺存しており，３は鉇とする積極的証左に欠けるが本墳出土鉄器で茎部断面が丸いのは，別に同図－２があり，一応，鉇として扱った。４は茎部から刃部の一部にかけての破片であり，刃部断面が半月形をなしており，狭幅の鉄鏃片とも考えられるが，本墳出土遺物には，他にこの類に入る鉄鏃がなく，一応鉇として扱った。２は，刃部幅２.３ cm，茎部径０.６cmをはかる。茎部下端と刃部先端を欠損している。刃部は，ゆるく弯曲した断面形をもつ。

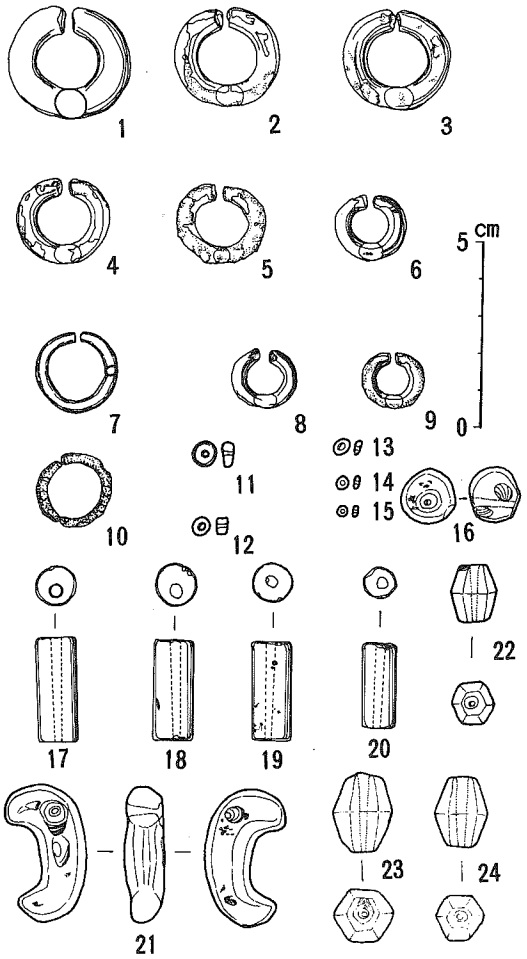
装 身 具　　（第13図，図版10）

装身具には，金・銀環，各種玉類がある。

金・銀環　第13図に示した大小10点がある。このうち，２～４・６の４点は銀環，10以外は金環であり，10は不明である。多少とも緑銹を帯びており，金銅張りが剝落しているものもある。１が最も大きく，２と３，４と５，８と９はセットをなすものであろう。10は剝落著しい。法量を示せば別表２のとおりである。

玉類　ガラス玉５（第13図11～15），棗玉１（同図16），管玉４（同図17～20），水晶製切子玉３（同図22～24），曲玉　１（同図21），貝製臼玉２がある。

11，12はガラス製で，11は輪切りの断面形を呈し，12の断面は丸みをおびている。17～20の管玉は，20のみがやゝ小型で片刳りの穿孔が施されている。16は棗玉で表面の研磨整形は粗く，穿孔は中心よりやゝ片寄って施され片刳りである。22～24は水晶切子玉であるが，３個ともやや大きさが異り穿孔は片刳りである。やや表面が荒れている。21は唯一の曲玉で「コ」の字型を呈し，表面の研磨はやゝ粗く，穿孔は片刳りになっている。



第13図　柿ノ本古墳出土装身具類（１／２）

表2．柿ノ本古墳出土装身具一覧1

No.	種　類	横・縦 (cm)	径 (cm)	重　量 g
1	金　環	3.12・2.83	0.70・0.66	32.0
2	銀　環	2.71・2.50	0.45・0.60	19.5
3	〃	2.62・2.45	0.54・0.59	17.3
4	〃	2.30・2.11	0.40・0.55	12.3
5	金　環	2.04・2.38	0.35・0.52	12.0
6	〃	1.54・1.74	0.40・0.57	7.0
7	〃	1.52・1.71	0.39・0.57	8.8
8	〃	1.42・1.53	0.32・0.47	6.0
9	〃	1.30・1.44	0.28・0.42	4.2
10	?	2.12・2.15	0.29・0.28	4.0

No.	種　類	横・縦 (cm)	厚 (cm)	色　調
11	ガラス玉	0.55・0.72	0.33 (平均)	濃青色・半透明
12	〃	0.55・0.55	0.3	淡青色・〃
13	〃	0.45・0.39	0.19	濃青色・〃
14	〃	0.37・0.30	0.11	〃・〃
15	〃	0.30・0.30	0.10	〃・〃

No.	種　類	横・縦 (cm)	厚 (cm)	色　調
16	棗　玉	1.45・1.49	平均 1.14	燈紅色半透明

No.	種　類	高 (cm)	最大幅 (cm)
22	切子玉	1.55	1.20
23	〃	1.84	1.32
24	〃	2.22	1.48

No.	種　類	高　さ	径	色　調
17	管　玉	2.49	1.02	濃緑色・不透明
18	〃	2.71	1.06	〃
19	〃	2.35	1.03	〃
20	〃	2.17	0.86	〃

表3．柿ノ本古墳出土装身具一覧2				
No.	種　類	縦・横 (cm)	厚 (cm)	
	具製小玉	0.76・0.90	0.47	
	〃	0.75・0.79	0.39 (平均)	
No.	種　類	全高 (cm)	断面 (cm)	色　調
21	曲　玉	2.30	1.20・1.03	茶黄色・半透明

註1　須恵器の各部の名称等については，田辺昭三氏の「須恵器の成形と焼成」陶邑古窯址群Ⅰ　平安学園考古クラブ　1966によった。

2　後藤守一　「日本古代文化研究」河出書房　1917

3　「対馬」長崎県文化財調査報告書第17集　長崎県教育委員会　1974

4　「鹿部山遺跡　福岡県粕屋郡古賀町所在遺跡群の調査」日本住宅公団　1973

5　　註2に同じ。

6　小田富士雄「高下古墳調査報告」　国見町教育委員会　1969

7　「遠目塚遺跡」南串山町文化財調査報告書　第1集　　南串山町教育委員会　1976

8　註3と同じ。

4. む　す　び

柿ノ本古墳は，調査以前における損壊が著しく，かろうじて石室部の平面プランを窺い知る程度であり，墳丘また流失著しく，形態を明瞭に知りえない状態であったが，調査の結果，南北の軸線上12m余を長軸とする円墳であったことは首肯されてよい。盛土も大方失われていたが，雲仙岳より北方向，不知火海（有明海）に張り出す丘陵の尾根末端近く，尾根道を僅かに外した位置を選定するなど，細心の注意が払われていることは，今後，古墳等の墳墓の立地を考えるうえで重要であろう。

石室は単室構造で，袖石によって羨道部と区切りをつける単純な平面構造をもったことも，ほゞ首肯できるであろう。石室等の構造については，腰石以上が崩落していたため，断定は避けねばならぬであろうが，直接周辺の古墳と比較したとき，持ちおくりのアーチ型断面をしていたであろうと考えられる。

遺物は，出土数が少く，表採資料を含めて考察せざるを得なかった憾みが残るが，出土須恵器は，羨道部において殆んど見られたのが注目される。また鉄鏃等の鉄製遺物が奥壁に近く大半を検出できたのは不幸中の幸であり，骨片や臼歯の検出位置とほゞ合致することは埋葬位置が，ほゞ軸線に添うものであったと考えられる。本墳出土の土器はきわめて特異なものを含み，時期を与えるのにためらいがある。なかでも，有孔つまみつきの坏蓋（第６図６），変形鉢（同図７）については教示を得たいところである。本墳の時期について土器による手掛りを，同図２の坏に求めれば第Ⅵ期になり，７世紀中葉ないし後半に比定できるであろうか。

本墳の立地する島原半島北岸一帯は，ゆるやかな扇状地形多く，本墳の立地条件もこれに近い。当地域は火山灰質土壌に覆われ，海岸地形の変容も激しかったと考えられるが，いずれにしても倭小短流に潤される平地も陜隘であり，現在でも水田経営の困難な土地柄である。この点は，不知火海北奥の地長崎県北高来郡も同様で，縄文時代以来の生活基盤がどのように変容し得たか，興あるところである。

図　　版

柿　ノ　本　　古　墳

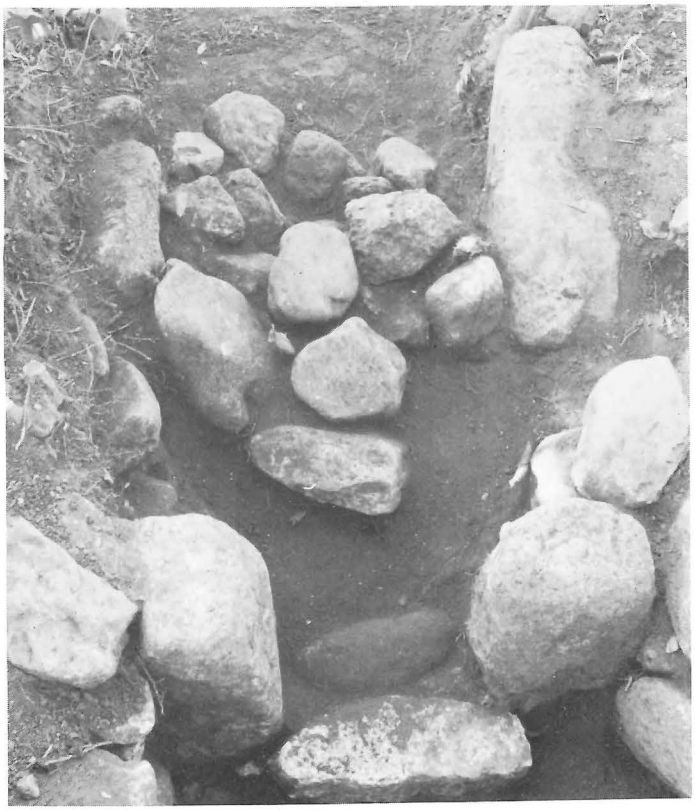
柿ノ本古墳と宅造工事

図版　2

柿ノ本古墳近景と石室（前庭部より）

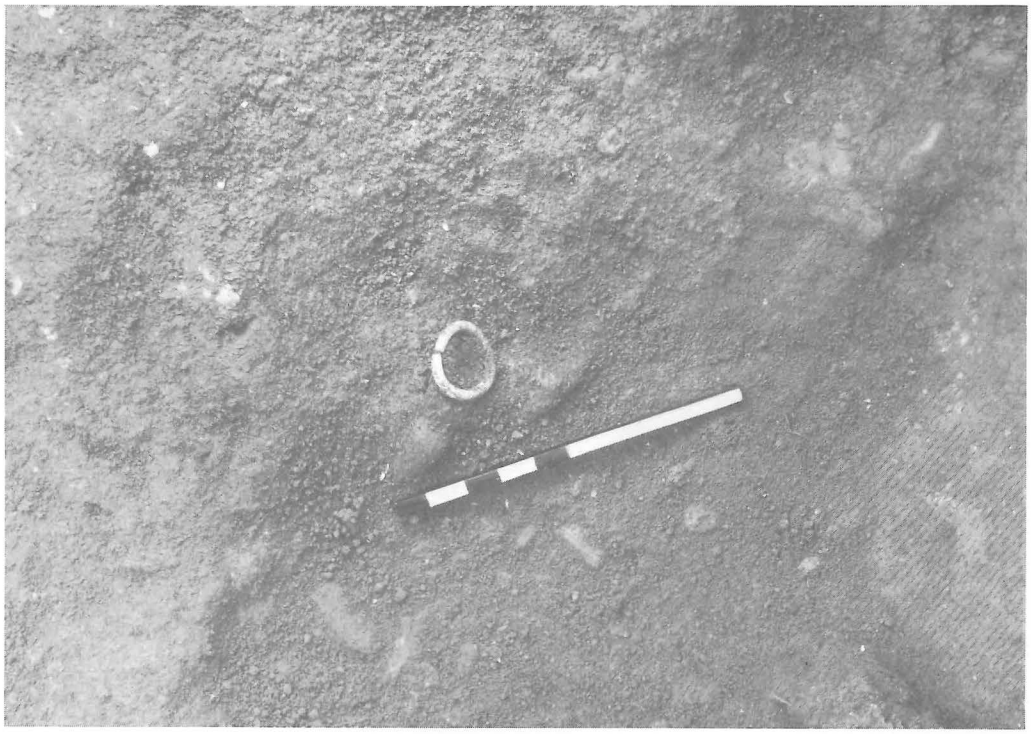
石　室　全　景

図版　4

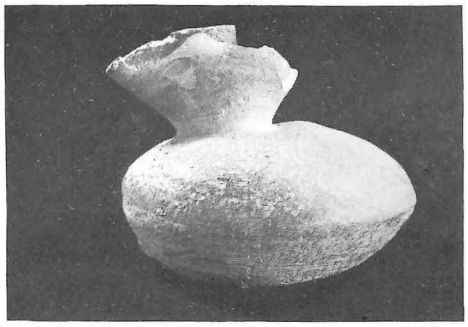


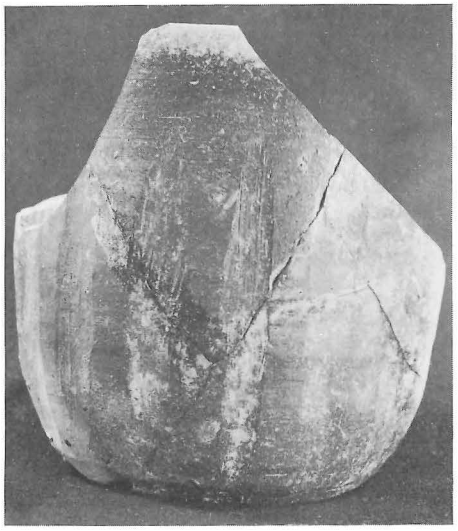
石　　室

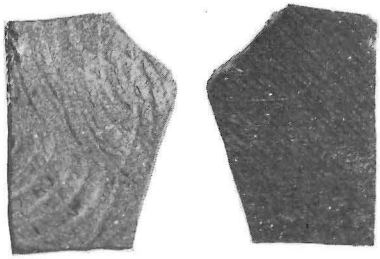
遺物出土状況

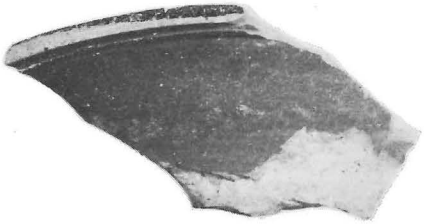


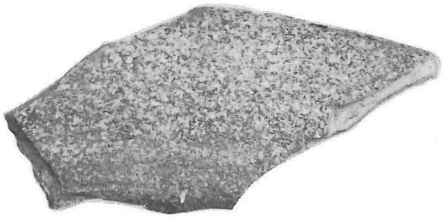
遺物出土状況







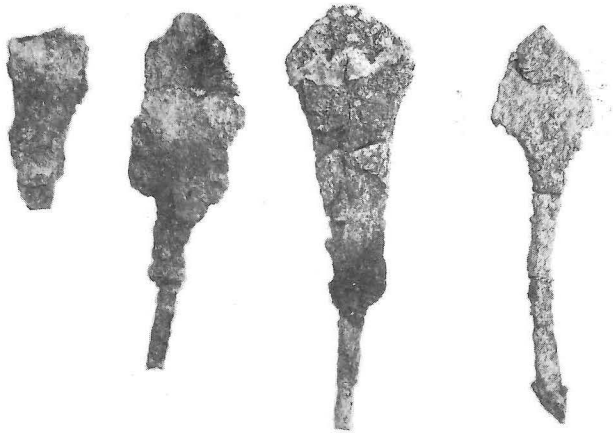


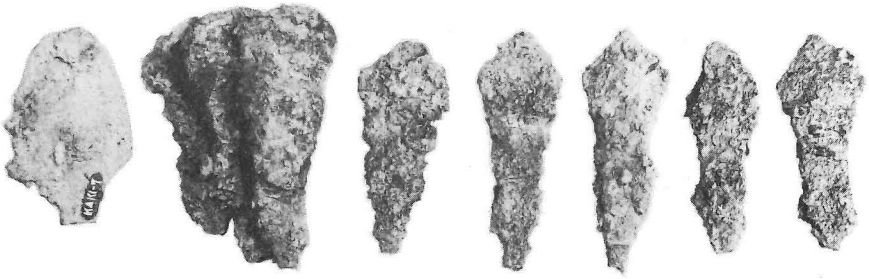


須　恵　器

図版　8

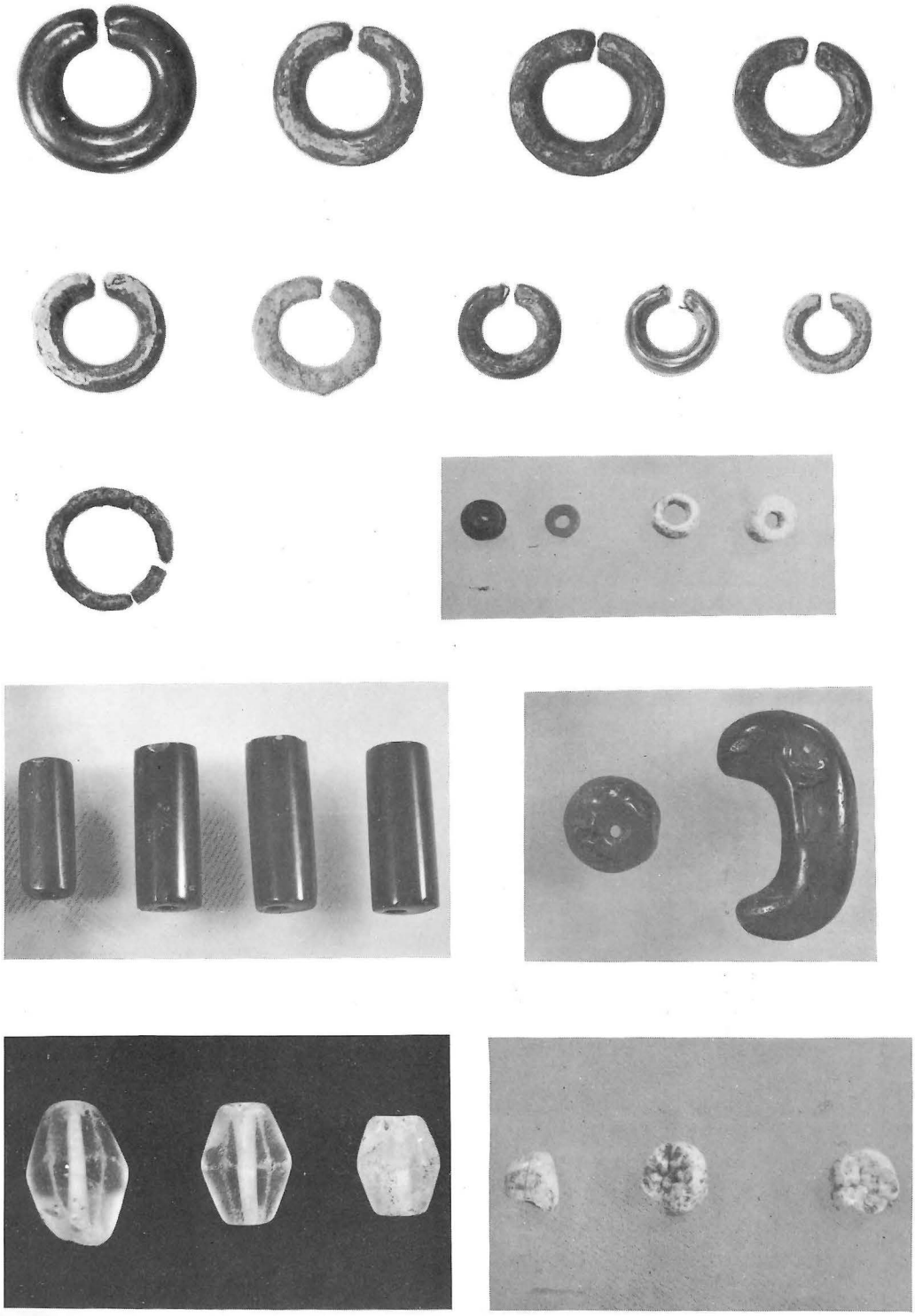
鉄　　器





鉄　　器

図版 10



装飾品及び臼歯

柿ノ本古墳
瑞穂町文化財調査報告書第１集
昭和53年１月31日
発行所　南高来郡瑞穂町西郷辛1285
瑞穂町教育委員会
印刷所　長崎市出島町15－15
東洋印刷所